

Title	深見篤慶先生(篤慶先生遺徳顯彰會編發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.157(321)- 158(322)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

元帥公爵大山巖

本書は日露戰役三十周年記念日に出版されたものである。編纂委員長尾野實信、副委員長二宮治重以下數名の委員の分擔執筆に係り、第一章大山家の家系以下維新前後の活躍、佛國留學、十年戰役、陸軍卿時代、陸軍大臣時代、日清戰役、日露戰役、内大臣時代等の二十六章に分れ、天保十三年より大正五年に至る七十五年に亘る元帥の一生を敍述したものである。尾野實信は日露戰役中總司令部參謀として行動を伴にし、二宮治重は最後の元帥副官たりし人であり、其他各筆者は何れも元帥と深い人格的の交渉を行つた人々であり、更に其の使用した史料は公爵家にあつた委員猪谷宗五郎の十數年來の蒐集に據つたものである。従つて、英醫「ウキリス」の招聘、國家君が代の撰定、兵制の改革、兵器に關する貢獻、東宮御輔導に關する事柄等未だ世人一般に知られなかつた事實が明かにされてゐる。是に於て讀者は元帥に對する一般世評たる所謂茫漠たる偉大に就て改めて明確な認識を得る事であらう。

元帥が明治、大正年間に於ける代表的人物の一人であり又皇國陸軍の生みの親である事は何人も知る所であつて、此意味に於て本書は明治、大正の各時代史であり、更に日本陸軍の發達史でも

あつて、遍く一般に閲讀せられん事を希望するものである。

本書は口繪挿圖の多數なる點にも特色を有するが、就中戊辰役淀、富の森附近の戰場航空寫眞は注目に値し、今後益々史學關係方面への航空寫眞の利用性多きを明示するものと考へられる。別帙附圖二十九葉は主として元帥の參加せる戰役の經過を物語り讀者に多大の便を與ふるものであるが、特に大部分を占める戊辰戰役關係各圖は從來之に類するもの渺く本書に於て始めて見る事の出来るもので極めて有意義なもので戰史の専門家にとつても大なる参考となるであらう。別冊の年譜は日記、自敍傳、書簡等に材料を探り本文に見えない元帥日常生活の一端をも覗ふ事が出来る。尙本書は其の序文にもある如く短期間に完成するの必要に迫られた爲、やむなく省略した點も少くないが是等に就ては公爵家に於ける豊富なる史料に基き近く元帥傳史料として次第に刊行せられる筈である。自分は只今史料整理に從事する一人ではあるが、本書が世上に流布する書と異り獨り明治史家のみならず各家庭に於ても子弟教養の爲にも有益と信じ敢て紹介するものである。

昭和十二・六・二（菅原精一）

深見篤慶先生（篤慶先生遺徳）

（篤慶會編發行）

本書は三河の勤王家深見篤慶の事蹟顯彰の爲め編纂されしもので、略傳の外遺稿其の他参考史料を收錄されて居る。
篤慶は通稱藤十、幼名友三郎、號松塙と號し、文政十一年十一月八日知多郡阿野村外山三助の長子として生れ、後、深見藤重の

養嗣子となり家業を承けて農の傍木綿問屋を營み、菊間藩主水野出羽守の用達を務む。又國學者村上忠順に就いて皇學並に和歌を研鑽し、勤王敬神の念夙に篤く、天誅組の義舉に給資し、敗戦するや、其の志士等四十餘名を庇護す。文久以來、有栖川宮の密旨を奉承して金品を獻じ、熾仁親王東征大總督として東下の際岡崎に出で奉迎し、其の頃尾參間に奔走して志士を糾合し赤心・報國等の諸隊を編成し、親王の西上に際しては一族と共に隨從し、歸國に際しては特に謁を賜ひ、御懇命を拜す。篤慶、歸郷の後は敬神興學の事に私財を投じ、又岳父忠順の爲め古書珍籍を蒐集して「千巻廻舍文庫」を創設し、或は國學和歌の書を上梓し、郷土の教化に力む。明治十四年三月二十五日病歿、年五十四。後大正二年十一月十七日、生前の功を追賞あらせられて從五位を贈らる。

篤慶妻愛子は忠順の女にして内助の功多く、晩年史談會の請に依り數回、夫君篤慶、父忠順その他一族の維新に於ける國事奔走の事歴を談じて居り、これは印行の史談會速記録に記載され貴重な維新史料である。昭和十二年三月（武田勝藏）

● 知恩院 史（知恩院定慶編）

法然上人の立教開宗以來七百六十餘年間、法燈燐然として輝く洛東の一大伽藍たる華頂山知恩院門跡に於ては、今次、祖徳顯彰の遠忌大法會を機會に知恩院史なる大書を上梓頒與せられた。

本書は之れを四篇に輯み、第一篇に知恩院の法脈傳燈を悉記し、第二篇に宮門跡創設前後よりの皇室關係を謹述し、第三篇に文化

史上に於ける知恩院の位置を詳記し、第四篇に年表を掲記し、開祖と歴世の略歴、知恩院の重要事項を摘記し、宗勢寺運の消長を一目瞭然たらしめ、第五篇に本論に使用せざるものにして、研究上必要と認められたる文治二年より明治十四年に至る参考資料を輯錄する。又挿入幾多の圖版は本論引用資料と共に讀者をして一層院史を了解せしむるものがある。

終に本史編纂主任井川學士以下の筆労に敬意を表し、この新刊を紹介し、又同宗宗運の益々隆昌ならむことを祈るものである。
昭和十二年三月（武田勝藏）

日本古文化研究所報告 第四

近畿地方古墳墓の調査 上野國總社二子山古墳の調査

日本古文化研究所報告第四として近畿地方古墳墓の調査（梅原末治氏）と上野國總社二子山古墳の調査（田澤金吾氏）の二報告が併せて上梓せられた。前者には

河内四條畷村忍岡古墳

攝津萬籠山古墳

丹波篠村樹塚古墳

近江和邇大塚山古墳

近江安土瓢箪山古墳
伯耆下北條の一古墳